

「JARL横須賀クラブ」創設50周年 御目出度う御座います

JE1YJL フタバハムクラブ

代表 JG1ERY 折原 民夫

心より御祝い申し上げます。一口に50年と言いますが、半世紀にわたりクラブを運営し、現在に至るまでには役員及びクラブ員には大変なご苦労もあった事と存じます。

現在の『JARL横須賀クラブ』に有っては県内に於いても非常に活躍されているクラブではないでしょうか。

電波型式が多様化している中で率先して運用しているクラブも『JARL横須賀クラブ』ではないでしょうか。

これからの活躍を期待致します。

アマチュア無線開局

私が無線を始めるきっかけは当時勤務していた会社の上司である窪田OM（故人JE1UZQ）の勧めによるものでした。

現場事務所にアマチュア無線の講習会用の本を持参し、明日の晩選抜テストが有るので一晩勉強し受験する様に勧められ始めました。

当時は講習会を受けるにも選抜テストが有りました。

講習会、本試験を経て開局申請をしコールサインを頂いたのが昭和48年12月（1973年）の暮れでした。

自宅でごたつに入りながら2mFMで初めてCQ・JG1ERYと送信したところ、即JA1II（中野OM）とコールを頂き、ふた文字コールの局で感激し汗を拭き拭き交信した事を、今も当時を思い出します。

当時使用していたリグは、TR2200（トリオ）内蔵ホイップアンテナにて運用していましたが、その後固定局用としてTR7200Gを昭和55年まで使用して、現在はモバイルに取り付け、まだ故障せず使用しております。

以上が私の開局当時でした。



フタバクラブ紹介

私共のクラブを簡単に紹介させていただきます。

昭和50年（1975年）にフタバハムクラブ（地域クラブ）JE1YJLを開設し、毎月第二土曜日午後9時より会長宅でグランドミーティングを開催しております。

平成7年（1995年）には、開設20周年を記念にアワードを発行しました。

平成12年（2000年）には、開設25周年を記念しクラブ員のQSLカードをアワードのデザインを縮小したカードに統一して作り発行しています。

平成17年（2005年）の開設30周年を記念して何

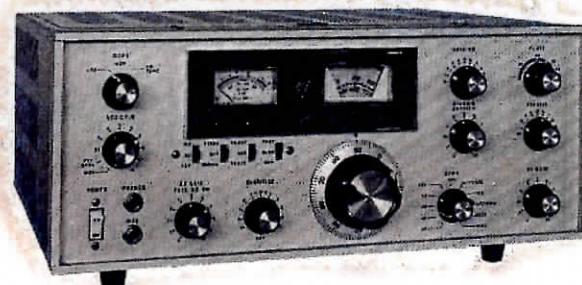
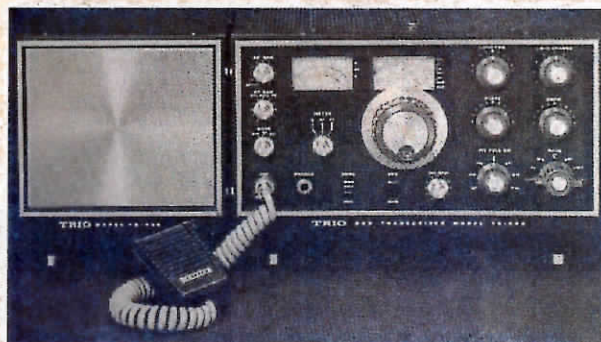
をしようか思案中です。



以上、簡単にクラブの紹介をさせて頂きました。

今後とも私をはじめクラブ員共々御指導を頂ければ幸いと存じます。

最後に、クラブ員を代表しまして『JARL横須賀クラブ』の益々の発展と役員はじめクラブ員皆様の御健康と、御繁栄を御祈願いたします。



当時の思い出

JA1AOW 齋藤 博

今から50年前、私は中学3年生だった。

その年初めてアマチュア無線というものの存在を知り、猛烈に興味を持った。

そして是非とも資格を取得したいと思いそのための勉強を始めた。

その過程で横須賀ローカル各局のラグチューを傍受し、深田台クラブで定例ミーティングが行われていることを知り、当初SWLとして出席した。

翌年高校に入学して間もなく国試を受験し無事合格、現在のコールサインが下りたのは昭和29年11月1日付であった。

その辺の経緯を書いてもあまり面白いとは思えないので、当時出会った局の中で特に印象に残っている、横須賀に所縁のある局のことについて書いてみたい。

1. JA1DT

私が最初に耳にしたコールサインである。その頃私は海外の短波放送局を受信してペリカードを集め始めていたが、ある日短波帯のダイヤルを回しているとスピーカーが破れんばかりの強力なシグナルが飛び込んできた。

当時アマチュア無線についての知識が皆無だった私にとって「これは何だ？」というのが率直な感想だった。

それから連日のように7M帯をワッチし、ラグチューを聴くことになる。大抵JA1DT、EH、ESの3局でラウンドQSOをやっていた。聴いているうちに、アマチュア無線に関する色々な知識が身についた。

DTさんの家は私の家から200mくらいの所にあった。ある日DTさんの声が聞こえてきたので、走って行くとシャックの窓を開け放して交信していた。私はというと、ただ黙ってその様子を眺めているだけだった。

それから暫く経つとDTさんの声が聞かれないようになった。私が開局してから二度とお会いすることはなかった。後から聞いたところではお亡くなりになったということである。あの時マイクに向かって独特のイントネーションで喋っていたDTさんの姿が、いまでも私の脳裏に焼きついていて。

何故、あの時声を掛けなかったのだろう。今はそのことが悔やまれてならない。

2. JA1IU

この局のことは以前発表したことがあるのでご存知の方もいると思うが、再度書いてみたいと思う。

幼少の頃、私は大津に住んでいた。2歳から5歳くらいまでの間だったと思う。

何分幼い頃の記憶であるから曖昧な部分もあるが、当時住んでいた場所は、裏木戸を開けると多分今の16号線に当たる舗装道路が走っており、向かい側にコンクリート製の防波堤がありその下は砂浜だった。夏ともなると海水浴客で賑わった。

そのほかの季節でも貝を採ったり、砂浜を手で掘って小さな水溜りを作り、その中に小魚を追い込んで遊んだ

りした。今では想像できないだろうが、当時の大津海岸ではそういうことができたのである。

そんな遊び仲間の中に「ヒーちゃん」と呼ばれる子がいた。「ヒーちゃん」は私より2〜3歳年長で、隣の家に住んでいた。彼はいわゆるガキ大将みたいな存在で、私などはいつも彼の尻にくっついて「ヒーちゃん、ヒーちゃん」と慕っていた。

その後私の家が平作に引越し、一度だけ「ヒーちゃん」がお兄さんと一緒に遊びに来たが、終戦となり、その混乱の中で音信不通となってしまった。

私が開局して間もなく、当時のコールブックを眺めていると、「長谷部弘道」という名前が眼に止まった。住所は千葉県になっている。私はもしかして隣に住んでいた長谷部さんの「ヒーちゃん」ではないかとピンときて、母に聞くと「弘道」という名前と生年月日から推して多分間違いないという。

そのコールサインが「JA1IU」だった。

早速手紙を出すと、すぐに返事が来て奇遇に驚いたということであった。

それから手紙のやりとりがあったり、QSOをしたりしたが、私が休局してしまったので、またまた疎遠になってしまった。

再開局して何年か過ぎたある日、IUさんから突然自宅に電話が掛かってきた。

コールブックを見て、私のコールサインが載っているのだから懐かしくなり、電話してきたということだった。

それから暫くして、私が彼の勤務先であるテレビ東京を訪れ、再会を果たした。実に50年ぶりのアイボールだった。

お互いに齢を重ねたが、彼の容貌には昔日の「ヒーちゃん」の面影が確実に残っていた。

3. JA1AON

この局は一時横須賀クラブに在籍したことがあるようなので、憶えておられる方もあるかもしれない。

コールサインに近いこともあって、開局当時よくラグチューをした仲である。

当時彼は土浦市に住んでおり、土浦一高の学生で学年は私より一年先輩であった。

名前は酒井さんという。

昭和31年3月のある日久しぶりに彼に呼ばれ、QSOをした。

彼の話は防衛大学に入学が決まり、横須賀に行くことになったのでよろしくということだった。私は是非自宅に遊びに来てくれるようにと話した。

4月に入ったある日、防大の制服を着た酒井さんが我が家にやって来た。制服姿の酒井さんは一つしか年齢が違わないのに、随分大人びて見えた。その後私が防衛大を訪問し、彼に校内を案内して貰ったりした。

しかし、私は翌年に大学受験を控えていることもあり、アマチュア無線にあまり時間を割くことが出来ない状況となっていた。翌年見事に受験に失敗し、1年間の浪人生活を経て大学生となったが、それ以降休局状態となってしまったため、酒井さんともそれきりになってしま

った。横須賀クラブの昔の記録を見ると、J A 1 A O N というコールサインが載っているの、その頃クラブの一員として活動していたものと思われる。

昭和 60 年、私が再開局してから局名録を調べてみたが彼のコールサインは削除されていた。その後どうなったか気になっていたが、つい先頃ひょんなことから彼の消息が知れた。

有線電話で話す機会を得たが、現在狭山市に居住しており、防大を卒業後防衛庁に入り、地方勤務が長かったということである。

アマチュア無線は卒業後全くやっておらず、復帰の意志もないようだった。

10 年くらい前に退官し、今は奥様にも先立たれ独り暮らしとのことである。

J A 1 A O N のコールサインも今回の再割り当てにより、全くの別人に付与されてしまった。さびしい限りである。

4. J A 1 A P P

私が免許を取得した頃は、最初予備免許という形でコールサインが付与され、落成検査を受けてから正式に無線局として認可された。

昭和 29 年 11 月に予備免許を付与された当局が落成検査を受けたのは、翌年の 3 月であった。予備免許期間中は試験電波ということで、専ら R S レポートの交換だけしかできなかった。ある日の夕刻 7 M H z 帯をワッチしていると、試験電波を発射している強力なシグナルが聞こえてきた。ブーンというハム音を伴い変調も割れていたように思う。

コールサインは J A 1 A P P といっている。早速当局はコールしてレポート交換をした。

Q T H を問うと衣笠だという。更に詳しく説明してもらおうと、現在のはまゆう会館の近くに当時並木座という映画館があったが、そのすぐ側のアパートだという。

私はすぐに自転車を走らせそのアパートを訪ねた。

そこでいろいろ話したはずだが、何分にも 50 年近く昔のことなので記憶が定かでない。

どこかの大学生で、苗字は確か久保田さんといわれたように思う。

再会を約して辞去したが、その後再び J A 1 A P P のコールサインを耳にすることは無かった。

これは全くの想像であるが、B C I が原因だったのではないかと思う。

当時はラジオというとは並四という形式が主流であり、構造的に B C I を受け易い代物であった。まして自作のリグでアパートという環境を考えると、なんらかのトラブルがあったのではないかと。それで嫌気がさして止めてしまったのではないかと思う。

おそらく当時の横須賀クラブのメンバーの方でも、この局と交信した局は無かったのではないかと考えている。

もし違っていたら大変申し訳ないが、別な意味で印象に残った局である。

開局当時の回想

J A 1 A F Y 奥村 進

戦後の昭和 2 7 年に日本のアマチュア無線が再開され、横須賀の空にハムの電波が聞こえました。

J A 1 E S (坂元さん) J A 1 E H (川島さん) でした。

S W L だった私は、7 メガで「イングランド スペイン こちらはエドワード ヘンリーです、どうぞ」なんて E S 局と E H 局が交信していたのです。

その後、J A 1 E S (坂元さん) のシャックに興味ある人達がだんだん集まり、そして月 1 回の月例ミーティングが深交 (シンコウ) クラブ (現在、上町深田町会) で行われました。

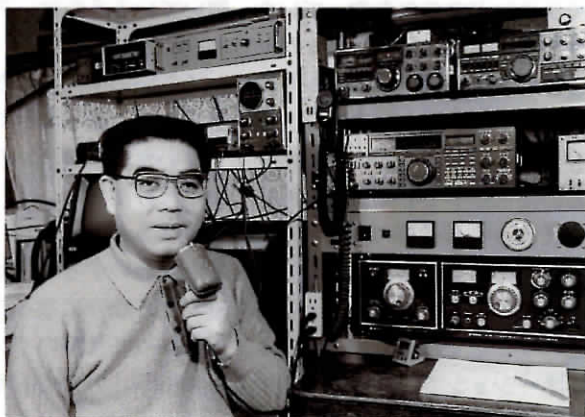
当時、三浦半島では J A 1 D T, E S, E H, I I, I V, J U, K H 局がオンエアされていました。

はじめには各局をめぐりシャックを拝見しながらミーティングが行われ、三崎漁業無線局、電監 (初声の監視部) の見学、そして米海軍基地内の K A 2 N Y 訪問など行われました。

その内、クラブ員も増えてきて V O Y クラブ報が J A 1 O G (石黒さん) のユニークな編集による記事が好評でした。

V O Y (Voice of Yokosuka) の由来は、当時、アメリカの短波放送で V O A (Voice of America) にあやかっ V O Y とする事になりました。

こんな風にヨコスカクラブは、始まりました。



横須賀クラブ

JA1BBN 高松 威

JARL横須賀クラブ 若林様

J A 1 B B N (e x J A 7 F D) 高松です。

私は、昭和30年、高校生の時から41年、結婚するまで横須賀クラブにお世話になりました。

また、会長も一期勤めさせて頂き、当時の勤務先の日本テレビ局見学会等も行いました。

(年月日は忘れましたが、昭和30年代後半だったと思います。)

当時の写真は、数度の引っ越しで多くが行方不明ですが、残っていたのが同封の写真です。

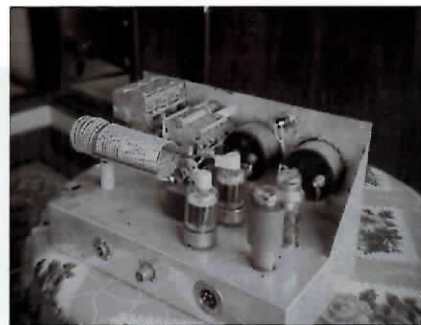
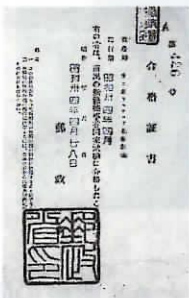
参考資料となれば幸いです。

私は、2年前63才で日本テレビを定年退職してその後、総務省のTVデジタル化準備の仕事をして退職しました。

今は、毎日が日曜日です。

たまにJA1AFYさんと50MHzでラグッています。

釣りが好きで横須賀近辺には、良く出かけます。
今後ともよろしく御願い致します。



アマチュア無線局開局の頃の遠い思い出

JA1BCD ex JA2FG/1 細田 徹

昭和28年8月28日〔1953年〕予備免許を与える。との郵政大臣塚田十一郎（故人）名の予備免許状が届きさあこれからが大変だと思いました。

10Wとは言え一体どの位の電源設備がいるのか、アンテナはどのようなものにしたらいいのか開設費用はどのくらいか等々問題山積です。取りあえずは最低のありあわせ部品をかき集め 6AG7-807 の

2
ステージで原発振は3.5MHzの水晶2波 3525KHz、3543.75KHzを金石舎に注文しましたが回路図など添付しませんでしたため後で苦労することとなりました。



6AG7変形ピアース回路で2通倍して807のSG変調としましたが変調回路はほとんど資料を見てもプレートハイシグ変調かまたは普通のプレート変調です。

SG変調なんてあまり資料がありません。ただ効率30%で807にはかなり高電圧をかけてリニアリティをよくすることができるとありましたので6V6で変調を掛けることにしました。

資金欠乏で工事落成延期願いを出して半年後やっと完成。電波管理局に落成届けを郵送していいよ係官の検査となりました。

当日周波数測定装置をかついで2名来宅。これから検査をはじめますが規定の値に入らないときは不合格になることもありますと脅かされギクとなる。

7050KHzの偏差は厳しくて第1回試験電波発射して約150Hz高い方にずれています。調整してください。と言われてさあ大変、どうやってFを動かすのだと応援のローカル局と話している間検査官様は一服してまあゆっくりやってください、と仰せになったがこちらは汗みどろで150Hzを下げるにはどーすりゃーいいんじや。7050KHzは下がってもう1波のほうはどうすると言った按配で時間が過ぎていくばかり。水晶を加工できるのは低いときだけと聞かされていたので困った。

そこでローカル局のOMが水晶に数PFのCを抱かせては？とのヒントで燃線を作って水晶片に抱かせて見たところこれがうまく行きなんとか10H

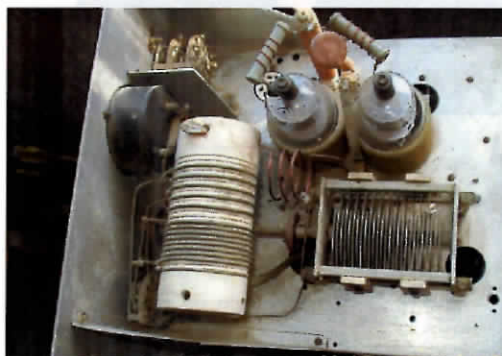
zまでの誤差に収まりました。万歳、！！

あとでSGとGNDの間に50PFぐらいのVCをいれて調整すれば簡単と言われてガックリ。

とにかく手探りの状態での毎日でBCIもなんのその隣からは「毎日面白い話をしているねー」なんて言われても屁の河童で夜遅くまで我鳴っております。

そのうちCWを練習して1アマを目指そうということになりCR発振器でピーピーやっていたらこれがなんと米子の電波管理局でワッチされこれはA2電波であり指定外運用との警告書（赤紙）を貰いあと1歩で機械を差し押さえされる寸前までこっぴどく怒られました。いやー、まいった、まいった。5Wぐらいで米子まで夜届くとは思ってもいませんでしたし7MHzは夜スキップしてほとんどなにも聞こえない状態でもかなり飛んでいるとは知る由もありません。

まあそんな程度の無線局でありました。



DX ハンティングの面白さとA3電波の限界

しばらく慣れてくると国内QSOばかりではつまらなくなってきた頃に2波が100KHzのバンドを許可されこれで少し自由に動けると早速VFOを作りましたが、周波数安定度が貧弱でしばらくするとFが大抵高いほうに動いてしまうので発振LC回路のCを色々くみ合せて温度補償等ずいぶん工夫しました。これで国外QSO第1号DU1GF局とコンタクト出来7095KHzぐらいでCQ DXをがりましたが、なんせ10WとハーフウェーブのLWではアジア境界が関の山で、Wまではとても無

理。そこで7010KHzに下がればCWの世界が開けていました。そこで内緒で終段の807のカソード回路にKEYを入れてWをコールするとコールバックありヤッター！！。

確かに当方の電波は太平洋を超えてカリフォルニアに届くのだ！と感激しました。いい気になってポコポコやっていましたが1957年就職でシャックを離れしばらくはDXともおさらば。

機械は持っていったのですが会社の寮では何も出来ず涙をのんで28MHzのBIG OPENを室内アンテナで聞いておりました。

たしか1962年ごろ岐阜にいて下宿の2FでCWだけで出ていました。A3は家主に迷惑が掛かるとまずいので出ませんでした。

それからは伊勢湾台風でRIGが水をかぶったりいろいろありました。もうRIGは動きませんがそのまま保存しています。

アンテナカップラーはまだ元気で働いております。なんか取りとめのない文章で申し訳ありません。

ご勘弁ください。



平成 15 年 7 月 1 1 日からJA1BCD



YOKOSUKA JAPAN 3-43-6 KAIJOI YOKOSUKA KANAGAWA 228-0013 ZONE-25 JCC-1130 C-2

JA1BCD

CONFIRMING OUR QSO

TO RADIO	DAY	MONTH	YEAR	UTC/JST	MHz	RST	2-WAY
			20				

YAESU FT-1000, FL101, FR101

PWR: WATTS INPUT PEP, DC

ANT: OP: TOWRU HOSODA

TX, PSE QSL 73, 88



当時の思い出

JA1BHZ 岡田 幸雄

横浜市金沢区で第一号を狙いました

私がアマチュア無線技士の従事者試験を受けたのが昭和31年（1956年）9月期（当時は10月ではなく9月期でした）で従事者免許をもらったのが12月でした。

（これは、話題一杯の話があり、いわく郵政省試験担当官の合格者記載ミス他ありますが、これを書くとこれだけでこの記事一杯になってしまうので割愛します、又別の機会に。）

私は当時ラジオに関係する仕事をしていましたのでCQ誌は創刊号から買っていました。

当時（昭和26年頃、1951年頃）は、ラジオ部品は神田須田町、神保町の露天で旧日本軍の通信機ジャンクと米軍のジャンクを路上に並べて売っていました。私がCQ誌創刊号を買ったのは神保町の古本屋前の露天商が戸板の上に並べてあったのを買った物で、当時は夢中で読みましたが、当時の記事の中に真空管UY-807を使った製作記事を大河内さんが書いていましたが、当時は日米行政協定が未協定のため、アマチュア無線は許可になっていませんでした。

当時はアンカーバーにも誘われたことも有りましたが、私はHiFiに夢中でしたので受信は自作の1-V-1受信機で短波放送を聞いては（BCL）いましたが、一度も電波を出したことは有りません。

CQ誌創刊号は赤色の表紙でしたがその後、緑色、青色と2、3号を買いましたが当時の記事はもうじき許可になる、と書いてありましたがなかなか許可がおりなかったのを思い出します。

それから数年後、私は自作のHiFi機にコンバーターをつけてアマチュアバンド（7メガ）を聞いてみると、当時は混信も無くハム同志が楽しそうに会話しているのを聞いて、私もアマチュアの試験を受けてみたいと思い、いろいろ調べ回ったところ、アマチュア無線をやるにはまずSWLから入って勉強してからやるべきという意見が多く聞かれ、私はJARLに準会員として入会し、“JA1-1171”を貰いました。



今になって考えてみるとまったく無駄な時間を費やしたもので、このことが現因で私が狙っていた横浜市金沢区のアマチュア第一号をJA1BFM松野さんに取られて、私は第二号になってしまいました。Hi

当時はアマチュア無線家の存在数とその土地（区）のレベルの高さと言われていたのですが、私がSWL当時に横

浜市磯子区から分離して金沢区が出来たので金沢区にアマチュア無線局は一つも無かったので、私は第一号を狙っていたのです。Hi Hi

さすがに当時の横須賀はレベルが高く多くのアマチュア無線局が声を出していました。

アンテナの思い出

写真に有りますアンテナは、50メガ4エレメントアンテナですが、当時はタワーの市販品も無くエレメント、ブーム、回転機と全部自作です。タワーになる梯子は自分一人で建てましたが、アンテナをつけるときはJA1IVの逸見さん（故人）はじめ当時の横須賀クラブのOM、YB7～8名の方々に手伝っていただきました。



当時はTVもやっと普及を始めたばかりの時代ですから岡田さんの家では大きなアンテナを建てたから、さぞかしTVが良く見えるだろうと近所の評判でした。Hi Hi

私は昭和37年に実家を出て近くに新築しました。こんどは庭が広がったので、長年の希望であったフルサイズのキュービカルクワッドを建てましたが、庭の端に14メガフルサイズのダブルレットを張って給電部にテスターを取り付けて、家内に見てもらい、私はアンテナにのぼってスタブの調整をし、アンテナをダイポールと反対側に回して、スタブの調整でテスターの指示が最低に下がった点を探して調整を終わりましたが、このクワッドは実に良く飛びました。

当時のQSLは今でも大事にとってありますが、今では私の宝物の一つです。Hi Hi

宝物パートII

宝物と言えもう一つ有ります。それは私が横須賀クラブの会長をしていた頃のことです。

追浜の国道16号を歩いていたとき米軍のジャンク品を売っている店を発見して店内を覗いて見るとジャンクの無線機の前に、ばいすけ（農具、穀物の籾を振るい落とす農具）の中にFT-243型水晶発振子が5～600個バラバラに入っているの、お店の人に「これ一個いくらですか」と聞くと、お店の人はX-TALののことを良く知らないらしく、「欲しければ1個10円でいいよ」と言うので私は六浦の家へ急いで帰って有り金をさらい出して、再度追浜のその店に向かい、そのX-TALを全部買い取りました。そのときこのX-TALの入れ物がある筈だと思い、探したところ弾薬ケースのような箱を1個発見し、それを良く見るとまぎれも無く、FT-243が60個2段で120個入るようになっていましたので、これも買いまし

た。

家に帰って良く調べて見ると120個がバラバラに4組み近くありました。

自作のディップメーターで発振状態を見ると、素晴らしく発振していました。中に発振していないがあるので、ビスを外して中を見るとリード線が錆びて切れているものがあり、ハンダしなおしたところ発振し、これで全部発振しました。



そこで早速、横須賀クラブのメンバーに私の家に来ていただいて、数人でこれを処分しました。まず本人の私が番号順に1組を取り、ついで全員で配分しましたがアット言う間に終わりました。確か番号280の5600KHzからNO. 400の8600KHzまで25KHz間隔で有ったことを覚えています。

勿論周波数歯抜けも数個有りましたが、私はその後、秋葉原で探して最終的には120個全部揃えた覚えがあります。

その後このX-TALは大変便利に使いましたが今では10個近く歯抜けになっていますが、でも私の宝物です。

このX-TALは落成検査に技官と文官と二人来ましたが、そのときにこのX-TALを見せたところ、技官の人が3個ばかり試験に持ってきた周波数測定器で調べてくれましたがその結果、これは素晴らしい、と言われたことを思い出しました。

思い出はまだまだ有りますがきりが無いのでこの辺で終わります。

楽しいアマチュア無線

本当にアマチュア無線は楽しく、やればやるほど奥深く私のように75才になっても頭もボケず家の中のシャックに座ってヨーロッパやアメリカと交信し、ポータブル機を担いで野外で通信したり、地域社会のお役に立つべく防災無線訓練をしたり、最近ではパソコンと無線機を繋いでSSTV（スロースキャンテレビ）で写真を送信したりして、やることばかりで老いこむ暇も無いくらいです。Hi

Hi

アマチュア無線技士の試験を受けた思い出 合格通知が来ない？

私がアマ無線2級の試験を受けたのは昭和31年（19

56年）の9月（当時は10月ではなく9月期でした）で、当時の試験は大変難しかったと覚えています。

（このことについてはこの1～2カ月後のCQ誌の編集後記に当時の郵政省は「これ以上アマチュア無線を増やさないように試験を難しくした」とはっきり書いてありました）

私が試験問題のなかでひとつだけ覚えているのは電圧変動率の計算問題がありました。

私の試験後における自己採点では間違いなく80点を超えていたと思いましたが、その後のCQ誌の試験問題結果を見ても間違い有りませんでしたので、合格を確信していました。

当時私の会社は新日本飛行機（株）でしたが、仕事は在日米軍の兵器廠でした。当時私は一職場の長をしていましたが、隣の職場の長が、私と同年代の名波君と言う男でした。当時のアマチュア無線の試験は土、日には行われずウィークデイだったので試験を受けるためには会社を休まなければならなかったもので、仮病でも使わなければ、試験に行くことが、隠しようが無かったので、試験の翌日、名波君が「岡田、試験の結果はどうだった？」と聞いてきたので私は胸を張って「合格間違い無し」と言いきってしまいました。

ところが、それからいくら待っても合格通知はこないので（当時は、不合格通知は無かった）私は不安と苛立ちを感じました。

当時国内の会社は休みが日曜日だけでしたが、私どもの勤務地は在日米軍兵器廠だったので土、日が休みでしたので、ある日名波君に今度の土曜日、秋葉原に部品を買いに行くついでに、悪いけど一緒に飯倉の郵政省電波監理局（以下、電監と書く）へ行ってくれないかと聞くと彼は気持ちよくOKしてくれました。

電監へつくと電監の担当者が「御用は何ですか」と聞くので「私は9月期の試験結果を開きにきました、私には自信があったのですが合格していませんか？」と言うと、その方は、「それでは一緒に来て下さい」と薄暗い何か室内体育館みたいところへ案内され、其処にあった一つの机の前に名波君と二人座らせられました。10分ほど後、その人が試験結果帳か黒表紙の帳面を持って現れ、机の上にその帳面を置いてバラバラとめくりはじめました。

しばらくすると「あっ」とその人が言うので、覗く込むと其処には、横線の中に20名程の名前が書き連ねてありその左端の空欄に合否結果らしいマークがついて右端には試験結果点数が書いて有りました。左端の合否結果を見ますとこの頁の全員に赤鉛筆で不合格のばつ記が書いてあり、私の欄もバツになっていました。全滅でした。

でも私の右端の点数は80点を超えていました。

